内閣府青年国際交流事業既参加青年調査

（１） 名　　前：Hasan Haider（ハサン・ハイダー）
（２） 年　　齢：36 歳
（３） 参加事業：第 22 回「世界青年の船」事業　参加青年（2009 年度）
（４） 職　　業：「プラス VC」創業者／マネージング・パートナー／CEO

■プログラム参加の動機

世界青年の船事業（以下、「世界船」という。）は、バーレーンの特定層にはよく知られています。バーレーン青年が世界船に参加し帰国すると、熱意たっぷりに「ぜひ次のチャンスに応募したらいいよ」と友人や職場の同僚に勧めるのです。バーレーンは小さな国ですから、既参加青年とつながることも珍しくはありません。私は、初期の参加青年だった方が私の姉の友人でしたので、彼女を通じて事業を知りました。私は世界船参加前に、ヘイグでの模擬国連関連プログラムに参加し、それ以外にもいくつか欧州関連のプログラム参加経験がありました。しかしバーレーンにいると、チャンスはあまり多くはありませんし、世界船の期間、交流の量、船で航海するスタイルとは比較になりません。大抵のプログラムは 1 週間ほどで、何か活動をして帰国する、というスタイルなので、世界船のように「どっぷり浸かる」ということがありません。

私は以前から日本や日本文化に魅了されていました。小さい頃から日本の子供向けアニメを見ましたし、元々ゲームが好きで日本製品として任天堂やセガが近しい存在でした。そして、大学卒業後に友人と初来日し、2 週間東京を旅して、大相撲を鑑賞するなど、日本の方々にとても親切にしていただいた思い出があります。その時に日本にいい思い出ができたので、日本とつながっていたいという思いは持っていました。しかし日本文化にどっぷり浸かるような体験や、日本人から直接学ぶ機会がありませんでした。また、船内活動を通して学び、さまざまな国の若者と交流する機会は、素晴らしいものでした。私の事業参加の期待は、日本と日本人について本当に学ぶことでしたが、私は事業で生涯の友人を作ることができ、事業終了後、彼らの多くに日本で再会し、自宅に招いてもらったり、バーレーンでも私の自宅に多くの友人を受け入れたりと、私の期待をはるかに上回ることができたと感じ、喜ばしく思います。

■キャリア形成に役立ったこと

私は**船内でリーダーシップを発揮することで、将来のキャリアに向けた準備ができた**と思います。また、世界各国から集まったさまざまな人々と密接に仕事をすることで、**文化的寛容さや感受性を身につけることができた**と思います。起業についての情報収集のために参加したというよりは、**オープンマインドでそこにあるものを全て吸収しよう、他者から学ぼう、体験しよう、という心持ちで臨みました**。それが正しいアプローチだと思ったからです。そうすることで、**自分が人生においてしたいことは何か、ということが明確になっていきました**。私は投資銀行でお客様の資産運用をしており、成績も良かったのですが、仕事や人生において思ったほどの満足感を得られていませんでした。お金をたくさん稼げれば幸せ、という人もいれば、自分の人生はお金儲けではない、と立ち止まる人もいます。そんな時世界船に参加して、次にやりたいことは何か、が明確になりました。

■特に影響があった活動

船内での小グループやプログラムを通した様々な活動は、すべて私が最初に想像していたものよりも考え方やスキルの幅を広げることにつながりました。前述の通りオープンマインドで参加したので、普段ならやらないことも、「はい、やります」と言ってみました。例えばクラブ活動で剣道を学びましたが、船上でこんな機会があったからこそ、やると決めたものなのです。また、アシスタント・ナショナル・リーダーを務めたので、バーレーンの参加青年をまとめるということも経験しましたし、参加青年と話をするだけでも、今どんなことをしているのか、どんな仕事をしているのか、どんな才能があるのか、など、**カジュアルな場での学びが公式プログラムと同じくらい刺激になりました。**私は船の中ではあまり睡眠を取らなかった方なのですが、それは「1 秒たりとも無駄にしたくない」という思いがあったからで、まだ起きている人がいれば話をするなど、そんな生活を送っていました。そう言ってお喋りした友人たちと、今日も関係性が続いているので、大変有意義な時間を過ごせたと思います。

■隔離された空間だからこその、純粋な交流

「世界青年の船」事業ほど没入感があり、インパクトのあるプログラムはありません。テクノロジーや日々の生活から切り離され、一緒にいることは、私の人生で最高と呼べる経験の一つだと心から思います。私は世界中の多くのイベントに積極的に参加し、スピーチをしていますが、「世界青年の船」事業の比ではありません。**世界船の構成そのものが、船の上で、違う国から若者が集まり、かつ事業の目的を同じように共有し、文化交流をし、お互いから学ぶ**というわけですから、船の雰囲気はその意味で独特です。他のプログラムに参加すると、1～2 週間一緒の時間を過ごしても、自由時間はショッピングに出かけたり、友人と食事に出かけたりするでしょう。船の場合は、そこに留まるしかなく、また仲間とは毎日会い、外界からも切り離されているので、プログラムの終わる頃にはもう何年も友人であるかのような**強い絆を築けています。**実は、「**隔離されている**」ということが有効だとある時気づき、自分の仕事においてもこの考え方を使いました。投資を受ける起業家たちを集め、また投資家たちも呼んだりして、どこにも逃げ場がないような環境で数日集まるということをしたら、とてもうまくいったのです。絆が強固なものとなり、参加したいという人が増えました。1 年目に 80 名、3 年目には 450 名来るようになり、エジプトの紅海近辺や、バーレーンの砂漠、ヨルダンの死海など、人がその目的でしか集まらないような場所を選びました。ですから、**世界船の経験は私の決断に影響した**と言えます。もちろん船のような期間はできませんが、隔離というコンセプト、世界から切り離されている環境が素晴らしかったです。つまり、毎日「今日は何をしようかな、どこに行こうかな」とは思わずに、そこにいる**人と人とが純粋に交流する、という、今日ではかなり珍しい環境**なのです。

■起業に大切な「オープンマインド」

このプログラムに参加したことで、**自分を信じてキャリアにリスクを取る**ことができ、新しい会社を立ち上げることができ、そのすべてが今日につながっていると思います。「リスクを取る」ということ自体を世界船で学んだのではなく、**自分のコンフォートゾーンから出る**ということで、仲間から誘われたりして、これまでなら自分が「やろう」と言わないようなことをやった、そして楽しめたということです。自分がそれをやると決めて、「やりましょう」と返事したり、これを試してみよう、この人と話そうと決める、そのような場面が繰り広げられます。自分のコンフォートゾーンを出て、試してもいい、学んでもいい、「やろう」と言ってもいい、そういう**マインドセット**を学びました。

起業家の視点からも、この事業をお勧めできる理由としては、**起業するということ自体が、「オープンであること、あらゆる体験から学べること、世界に目を向けて学ぼうとすること」**だからです。結局のところ、人と人との交流により、起業家は資金を集めることができたり、チームを組むことができたり、事業拡大したり、顧客やユーザーを理解したりできるわけで

す。起業に大切なのはマインドセットで、いろいろ試せる力、実験できる力が必要で、そこからやっとスキルセットが必要になります。スキルセットはさほど難しくありませんが、マインドセットは大きな部分を占めます。**世界線に参加することで視野が広がり、見る世界は変わります。**自国に留まっていただけでは決して実現しないような、道が拓かれるのです。

■日本青年の生真面目さ

事業に参加して、日本人をより深く好きになりました。事業終了後には、船の友人に教えてもらいながら日本語を勉強し、少し話せるようになりました。日本青年は、英語が話せないことがコミュニケーションの障壁となっていると感じました。私はそれを緩和できるように、「私は日本語が分からないんだから、問題ないよ」「日本語を教えてほしい」という形で、コミュニケーションを取りました。日本人は、文化的な背景として、「間違えたくないので何も言わない」というのがあるかもしれませんが、事業が進むにつれて日本青年の恥ずかしさや不安も取れていったように思います。そしてもう一つは「生真面目さ」があるので、何かの準備に集中し過ぎて、他のことを楽しむ余裕がないように見えたこともありました。「これをやらなきゃいけないから、楽しんでいる時間がない」という感じだったので、「休み休みやった方がいいよ」「やっていることを楽しんで」と声をかけたりしました。真面目なことはよいことですが、真面目すぎると他に楽しむ機会を失ってしまうことになります。世界船のような場では、**何か目標達成のために注力するのも大切な一方で、そのことで自分が思ってもみないチャンスが通り過ぎてしまうこともある**ので、勿体ないです。

日本青年と外国青年の違いというよりは、日本青年は外国青年を、外国青年は日本青年を知ろうとし、お互いに溝を埋めようとそれぞれが努力していると思います。私はバーレーンの青年たちには、「私たちはバーレーンで一生顔を会わせる関係なのだから、船の上では他の国の人とできるだけ喋ろう」と言っていました。

■リーダーシップスタイルの変化

船内活動では、異なる立場や異なる文化、異なる国の人々と過ごした時間は、自分の人生で歩んできた道以外のさまざまな可能性に心を開かせてくれました。自分の周りの世界にもっと影響を与えたいと思うようになりました。

寄港地活動では、さまざまな国の政府高官と会うことで、どのような役職にある方でも必ず会う手立て（アクセス）があることが分かりました。自分が若かった頃、たとえば一国の首相のようなレベルの人に会えるとは思わないわけです。しかしプログラムの中でそれが実現し、「会おうと思えば会える」というマインドセットに変わります。そうすると、次は自分が会いたい人、話したい人が出てきた場合に、「どうやったら会えるか」を考えるようになります。その方と話したり繋がったりすることへの価値を示せると思えば、相手のレベルは関係ない、そう思います。

これに加えて、代表団のリーダーやグループのサブリーダーを務めたことは、私のリーダーシップスキルとスタイルを磨き、洗練させるのに役立ちました。私はこれまで常に上に立ち、「あれをして、これをして」と管理し、できているかどうかを確認するような指示型リーダーだったと思います。でもそれをしていると、自分に仕事が増えるだけだと気づきました。リーダーは人を扱っており、人にはそれぞれマインドセットがあるので、リーダーはそれぞれの人に合わせて、その人がどう接してほしいのかを考えるようになりました。あらゆるタイプの人と仕事をしますので、一つの正解が次にまた使えるとは限りません。そして、もし**適任の人たちとチームが組めるのであれば、その人たちの力を信じて、彼らが役割を全うできる**よう、「（作業完了を）いつまでにお願いします。あなたはできると思っているから、がっかりさせないでね」と伝えるだけです。その方がうまくいくと分かり、自分の中に「気を抜く瞬間」があることで、リーダーとしての余裕が生まれます。チームメンバーは自らを監督するようになり、周りから感謝されていると感じ、作業者ではなく人間として扱われていると感じます。

■船を使う国際交流事業の強みと意義

船は、**共同作業や異文化の学習を真に保証する最良の方法の一つ**であり、正直に申し上げて、ユニークで貴重な体験だと思います。私の人生の中で、**海で過ごした時間に匹敵するものはありません**し、**船上で築かれた友情の絆は何十年も続いています**。結局のところ他者理解が大切ということで、関係性を築くと、それ以降の物事がスムーズに進むようになります。プログラムの中でも、まず人を知る、友情を育む、そこから何か一緒に物事を成し遂げたり、課題にチャレンジしたりします。**「ピープル・スキル」を培うことができた**と思います。どんな時にもあらゆる意見が出ますが、この世に 2 種類の人間がいるとしたら、「よい信条のもとに行動する人」と「悪い信条のもとに行動する人」で、大抵は前者ですし私は前者と働くことを選びます。ですから、よい信条のもとに行動をすれば、それぞれの妥協がありながらも、目的に向かって解決策を見出せると信じています。

■投資家としてのキャリア

私は、**世界、そして自分の所属する社会に、本当に影響を与えたいと思い、**この地域でベンチャーキャピタリストとして活動することを通して、それを達成したいと思いました。世界船事後活動の動きと、ベンチャーキャピタリストの動きにはあまり共通点がありません。というのも、テック系やスタートアップ、起業の分野は個人ベースでの動きがほとんどだからです。私はこれまで何百ものスタートアップ企業に投資し、何千もの雇用を創出し、活躍の場を必要としている人たちに機会を提供してきました。私が投資した企業は、現在 40 億ドル以上の価値があり、中東と北アフリカ（エジプト、バーレーン、UAE といった場所）でインパクトを与えています。私が投資対象としているスタートアップ企業は、大抵 3、4 人で始め、商品があり、お客様なりユーザーがいるという規模感で、ビジネスを次のステップに持っていくのが私の役割です。第 1 期の 3 年間投資は、180 社に対して行い、第 2 期は 120 社に対して行う予定です。投資金額は 20 万ドル程度ですから、巨額ではありませんが、この地域では大きなインパクトを生むことができます。

日本との接点はまだありません、というのも日本は日本でエンジェル投資家がいますし、スタートアップ企業に対する資金が得やすい状況だと思いますので、私のビジネスが日本に進出する利点があまりないからです。もちろん日本の投資家で、中東に投資したいという方々とお話をすることがありますし、日本の投資銀行が中東にご関心があれば、喜んでおつなぎしたいと思います。

■事業後の社会貢献活動

プログラム終了後、**自分にももっとできることがあることに気づき、私ができることは全てやりたいと思いました**。私はロータリークラブに入会し、世界青年の船事後活動組織（SWYAA）バーレーンで活動するようになり、一年ほど役員を務めた時期がありました（私の仕事では国外出張が多いため、役員の任務は降りています。）。事後活動組織はよい組織体制を敷いており、バーレーンの日本人コミュニティとの活動や、日本人学校訪問、日本大使表敬、日本映画上映会などの文化・芸術活動など、様々です。そして既参加青年の食事会など集まりを持つこともありますし、恵まれない子どもたちのために環境、スポーツ分野で活動するなど、毎月何かしらの活動を行っています。

ハサン・ハイダー氏のプロフィール

投資銀行での勤務を経て、2009 年度の第 22 回「世界青年の船」事業に参加。同年、テック系スタートアップ企業への投資と支援を行うバーレーン初のエンジェル投資家団体「Tenmou」を共同設立。「Tenmou」において新興市場でのエンジェル投資を発展させた業績が注目され、世界銀行やハーバード大学でケーススタディとして取り上げられた。2013 年度、「平成 25 年度グローバルリーダー育成事業」（SWY26 相当）では、バーレーンを訪問した日本青年団の視察先として協力した。その後、「500 Startups」を経て 2020 年より、「プラス VC」の創業者兼マネージングパートナーとして、中東・北アフリカ地域のスタートアップ投資を行う。